Ⅳ　王権・地域間における後期埴輪の展開と系統

ここまで後期の奈良盆地における埴輪の系統関係、生産・流通体制について、現状で可能な限り詳しく整理してきた。本章では、それが隣接地域や遠隔地の埴輪の展開といかなる関係を有するのかについて、簡単に検討しておきたい。

1　A類の展開と古市古墳群

通有のⅤ群円筒埴輪にあたる本書A類は、中期のⅣ群円筒埴輪の技術系譜上に位置するもので、かつⅣ群からⅤ群の変化は極めて連続的であることは前述した通りである。Ⅳ期末からⅤ期古相段階において、王陵の造営が継続する古市古墳群と奈良盆地では、奈良盆地において底部調整の内面ケズリがやや目立つ点を除くと、埴輪の特徴に大きな相違はなく、中期以来の両地域間における様式構造の一体性が維持されているといえる。

その後、Ⅴ期中相頃から奈良盆地内ではA類の系統分化が進行するが、Ⅱ群無調整突帯（断続ナデ技法B）は古市古墳群やその周辺の河内地域にも分布が集中しており、従来から同技法の発信源のひとつとして理解されてきた。奈良盆地南部および中央部に展開するAa類の分布圏は奈良盆地内で完結するのではなく、古市古墳群周辺と一体のものである点は間違いない。Aa類の一体性は奈良盆地でA類が系統分化し始める以前からのものであり、その関係は埴輪生産の終焉まで維持されたとみられる。

さらに長期的にみれば、大和川の流れを介した両地域間の親密性は、古墳出現期の庄内形甕の分布や展開、前期中葉段階における纒向遺跡や西山古墳、古市古墳群中の赤子塚古墳下層におけるⅠ群極狭口縁の共有、前期後葉段階では上ノ山古墳と萱振1号墳におけるⅡ群円筒埴輪の類似などとも響きあう。後期に系統分化をとげた後のAa類の分布が盆地南部を中心とする点は、この地域の勢力こそが古市古墳群周辺と本質的に一体性を有する集団であった可能性を示唆していよう。

2　B類（大和南部型）の隣接地域への展開

既に指摘があるように、B類（大和南部型）は紀伊・紀ノ川下流や近江・野洲川流域においても一定の分布圏を形成しており、南山城や播磨の一角にも類似資料が点在する。なかでも紀ノ川下流域は、B類が分布する奈良盆地南部と地理的に直接連なる地域であり、従来からその創出・生産主体をめぐって論争が続いてきている。

前述のように、本書では盆地南部に濃密な分布圏が存在することに加え、少なくとも9種類以上におよぶヘラ記号の存在からも一定規模の生産集団の存在が見込まれ、拠点的生産地を構えての生産・供給関係が復元できること、さらにはB類を創出し得る技術系譜上の背景として回転ヨコハケを多用する渡来系土器製作集団の足跡が辿れる（中野2010）ことから、B類は奈良盆地南部で創出され、この地を中

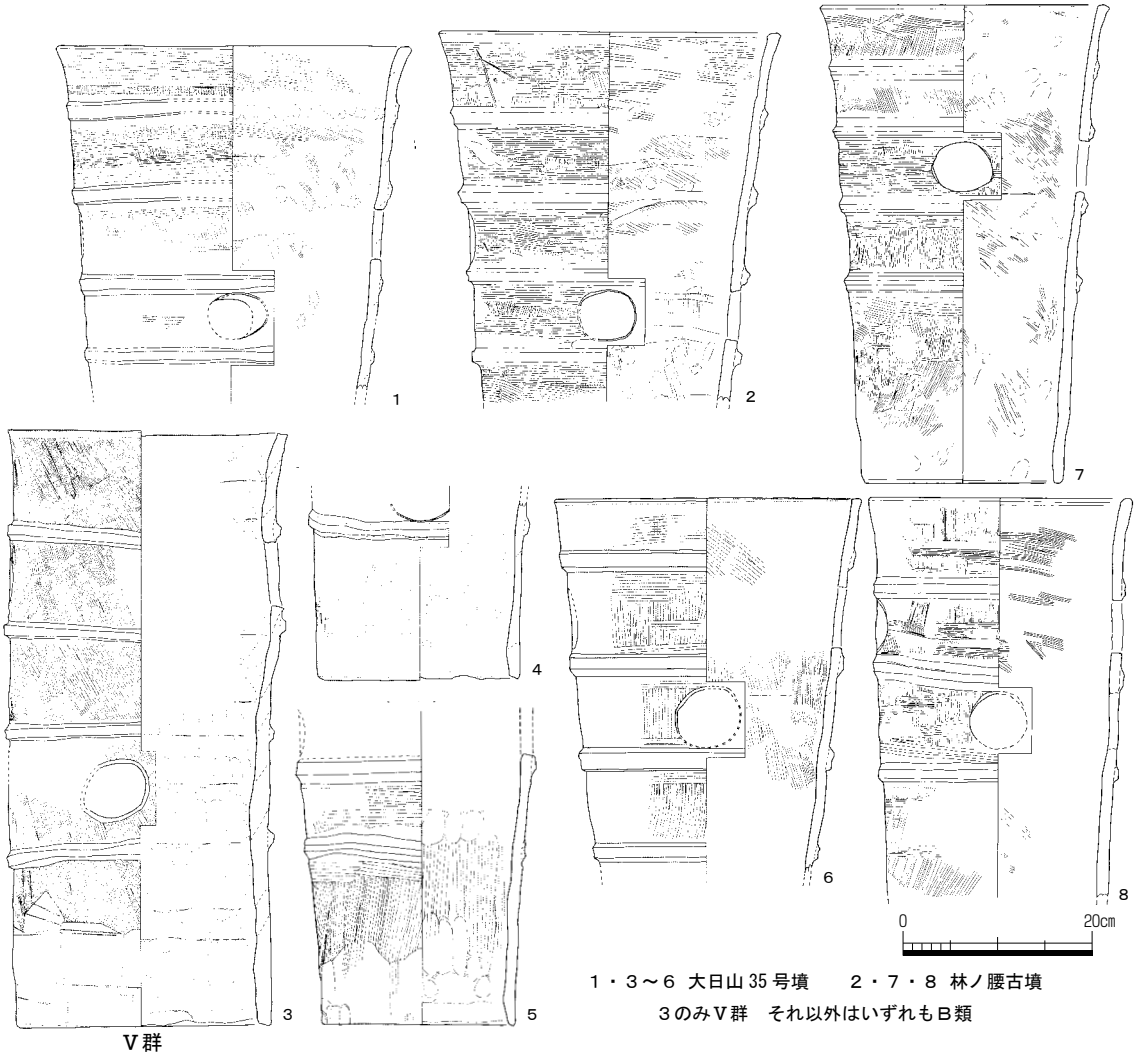


Fig. 27　大日山35号墳と林ノ腰古墳の埴輪　1:8

心として生産され、各地へ波及したと考える。

紀伊中心説の拠り所である段構成の多寡については、前述したように系統とは別の論理からなるもので、主たる根拠とはならない。むしろ、紀伊地域の大日山35号墳や大谷山22号墳で４条５段とみられるB類が出土している点は、両古墳に供給されたＶ群円筒埴輪に段構成を一致させたものとして捉えることができる（Fig. 27）。同様の現象は奈良盆地内の市尾墓山古墳においても生じている。加えて注意を要するのは、奈良盆地の基準に照らし合わせるならば、大日山35号墳の86m、大谷山22号墳の68mの墳丘長に対しては、７ないし６段構成の埴輪が供給されて然りであるが、実際にはそれよりも１・２段低い評価となっている点である。墳丘長90mの前方後円墳である野洲市林ノ腰古墳における４条５段のB類の樹立も（Fig. 27-7）、紀伊と同様の現象としてして理解できる。この点からも、B類の展開における地域側の主体性を過度に強調することはできないと考える。

では、B類が奈良盆地南部を拠点にこうした隣接地域に波及する背景はどのように理解したらよいだろうか。前述のように鐘方は、B類の生産集団を奈良盆地南部の豪族による私有組織とみた上で、その豪族層を建内宿禰後裔氏族（波多・巨勢・蘇我・平群・紀・葛城）に比定し、その配下の埴輪工人の一部が

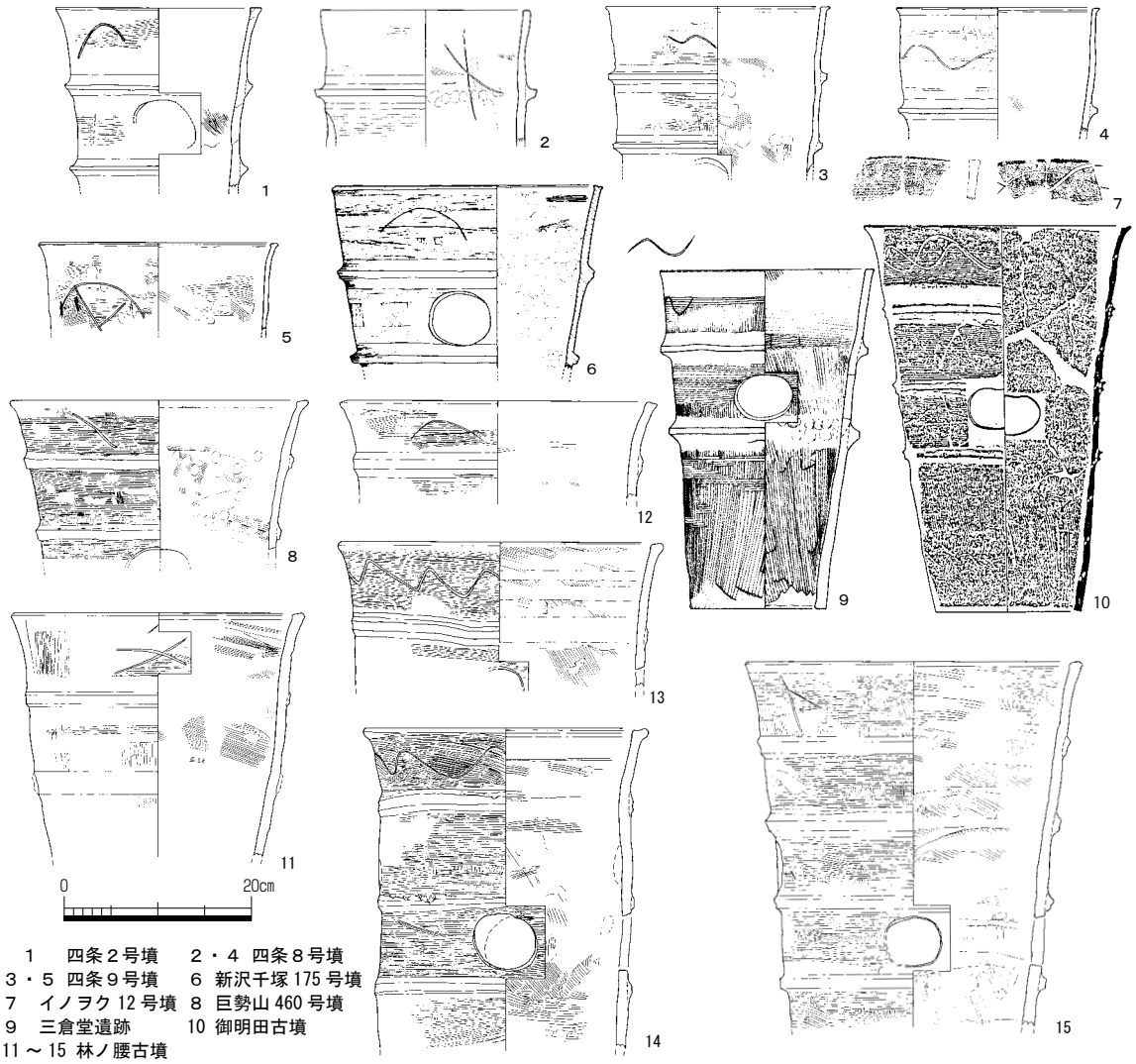


Fig. 28　B類（大和南部型）のヘラ記号　1：8

同祖同族関係を有する各地へ移住することで同系統の埴輪が拡散することになったと理解する（鐘方2003）。辻川哲朗も鐘方の指摘を支持しつつ、市尾墓山古墳の被葬者を巨勢男人、林ノ腰古墳の被葬者を近江毛野臣とみて、林ノ腰古墳におけるB類の採用に「継体期の政権中枢を担った有力豪族間のネットワーク」の存在を見出す（辻川2010a・b）。

鐘方や辻川の指摘は、文献史学の成果との整合性がみられる点で魅力的な解釈といえるが、両者とも盆地南部から紀伊あるいは野洲川流域への工人移動を想定する。これに対して筆者は逆に、同祖同族的な結合関係を有する周辺地域から奈良盆地南部へ製作者が上番し、一定期間製作に従事した後に帰郷した可能性を考える。製作者の移動の方向性を実証的に見極めることは難しいが、前述のようにB類は、多数のヘラ記号の存在からも奈良盆地南部において生産拠点を構え、一定規模の生産組織のもとで恒常的に製品供給をおこなっていた可能性が高い。製作者の他地域へ一方的な流出は、そうした恒常的な生産体制の存続を困難にする。むしろ、同族的結合関係にある地域から労働力を動員することで生産体制を維持していたものと推測される。

なお、紀ノ川下流域では、これまでのところヘラ記号は波形の一種しか確認されていないが、この点は奈良盆地南部における波形のヘラ記号を描く生産単位へ限定的に上番・出仕した結果を反映したものと考えられる。一方、野洲川流域の林ノ腰古墳では、4種のヘラ記号が確認できるが、奈良盆地で未確認のものは1種で、残りの3種はいずれも奈良盆地に同じものが存在しており（Fig. 28）、おそらく未確認の1種も将来的には奈良盆地で発見される公算が高い。林ノ腰古墳で多くのヘラ記号が存在するのは、Ⅴ群系埴輪を補完する紀ノ川下流域のあり方とは異なり、墳丘長90mの林ノ腰古墳のみならず、御明田古墳をはじめとする周辺古墳のB類を体系的に生産しているためであろう。いずれにしても、こうしたヘラ記号の一致は、上番・出仕時に帰属した奈良盆地南部での各生産単位との具体的な結合のあり方を如実に物語っている。

また、紀ノ川下流域と野洲川流域のB類では、4条5段の大型品として製作される場合に、透孔は2～4段目の各段に穿つのではなく、2・3段、ないしは3・4段のいずれかに2孔を直交して配置する原則が認められる。つまり3段分を連段穿孔できるだけのスペースが存在するにもかかわらず、なぜか2段目か4段目を無孔とするルールが遠く離れた両地域で共有されていることになる（Fig. 27）。その意味は理解しかねるが、やはりその情報の発信源は奈良盆地南部の拠点的生産地にあったとみて間違いない。

さらに、B類の焼成は軟質で局所的ながら黒斑を有することから、野焼き焼成による蓋然性が高いことは前述した通りであるが、この点も奈良盆地南部、紀ノ川下流域、野洲川流域の三者とも同様である。その上で、和歌山市平井埴輪窯では1号窯において通有のⅤ群円筒埴輪に混じってB類が共伴することが確認されている点が注目される。本来、窖窯焼成技術を保持していなかったB類の製作者が、紀ノ川下流域に帰郷後、一時的にⅤ群系埴輪の生産集団に自らの製品の焼成を依存していた状況をうかがうことができ、興味深い。

以上のように、奈良盆地のB類の生産体制は、同族的結合を通じて他地域から労働力の提供を受けることで維持されていたとみられる。先に奈良盆地におけるB類の展開について、工人の巡回ではなく製品供給が基本とみられることから、王権への労働奉仕よりも貢納という側面からの評価の可能性を指摘したが、その貢納体制を支える労働力の一部を他地域の勢力にも負担させていたものと推測される。結果的にそこで製作技術を体得した工人が本貫地に帰還し、そこで埴輪生産に従事することで奈良盆地以外の地域でも局所的にB類の埴輪が出現することになったと考えられる。B類の場合、後に「土師氏」と称される王権直属の生産集団とは直接的な関係をもたずに、奈良盆地南部の豪族層のもとで埴輪生産に従事していたとみられるが、その製品が特定豪族の支配範囲を超えて奈良盆地内の需要の一部を分担していることを踏まえると、その埴輪生産体制は単なる豪族層の私的関係に帰すものとは考え難く、間接的には王権への奉仕体制の一環をなすものであったと捉えるべきであろう。すなわち、B類にみる埴輪生産体制も、部民制的構造のもとでの王権への奉仕の一実態を反映しているものと理解される。

3　Ac類の隣接地域への展開

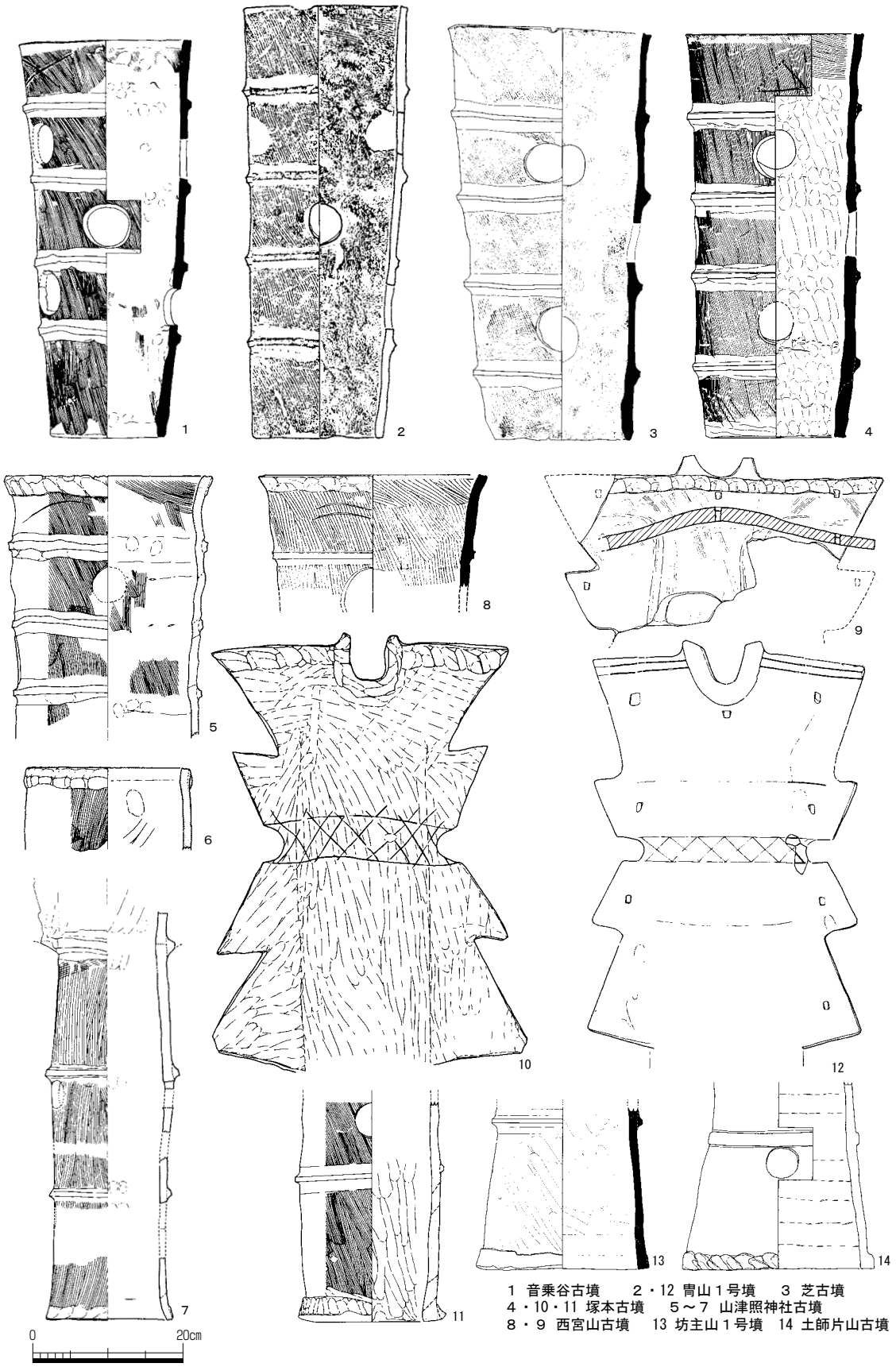
本書の奈良盆地における後期円筒埴輪の系統識別では、従来、菅原東窯を中心に単一的に捉えられてきた奈良盆地北部の系統において、あらたにAc類の存在を見出せた点を特筆できる。前述のようにこのAc類は、奈良盆地中央・東部、局所的には南部の四条古墳群にまで分布がおよぶが、一方で、隣接地域の南山城地域や乙訓地域でも、このAc類が濃密に分布する。倶体的には、平城山丘陵の北端に位置する木津川市音乗谷古墳のほかにも、城陽市冑山１号墳、宇治市坊主山１号墳、長岡京市塚本古墳、同舞塚１号墳、同井ノ内車塚古墳、京都市芝古墳、向日市中ノ段古墳などでAc類が受容されている。この地域では、宇治市旦椋遺跡のB類、京田辺市堀切７号墳や宇治市五ヶ庄二子塚古墳などの尾張系埴輪など、異なる系統の埴輪もモザイク状に流入するが、Ｖ群円筒埴輪の大部分はAc類であり、物集女車塚古墳にみるAa類の流入は極めて特殊な事例といえる。

従来から南山城地域のＶ群円筒埴輪については、断続ナデ技法Bを採用しない点に加えて、石見型埴輪や陶棺などの共通性から、奈良盆地北部との親縁性が指摘され、その影響元となる生産拠点として菅原東窯が位置づけられてきた（鐘方ほか1995、鐘方2003・2017）。近年、村瀬陸もこの見方をさらに発展させ、菅原東遺跡を基軸とする石見型埴輪の変遷観をもとに、その地域性がおよぶ「大和北部～山城南部地域」の範囲を「菅原東系石見型埴輪共有圏」とよぶ（村瀬2018b、2019）。

しかしながら、本書分類のAc類は、前述のように透孔配置や細部の技法的特徴において菅原東窯を中核とするAb類とは明確に区別されると考える。菅原東窯出土の貼付口縁は、貼付押圧口縁とは異なり、ユビオサエ痕跡が不明瞭で総じて平滑に仕上げられている点もその一例である。さらには、音乗谷古墳や冑山１号墳、塚本古墳などのAc類に伴う石見型埴輪は、形象部上辺を粘土帯で加飾し、また形象部下辺の隅を頻繁に切り欠く特徴があるが、これまでのところ菅原東窯ではそうした特徴をもつ事例は知られていない。底部突帯も、底部下端にユビオサエ痕跡を残して粘土帯を貼る鐘方ｂ類はみられず、底面よりやや上位に通有の突帯を貼る鐘方ａ類の破片が多数出土しており、やはりAc類とは特徴を異にする。菅原東遺跡の石見型埴輪は、むしろAa類に共伴する石見型埴輪との親縁性を有しており、おそらくA類が系統分化する以前の特徴を維持・継承しているものと推測される。

このようみてくると、南山城や乙訓地域に対して直接影響を与えたのは菅原東窯ではなく、平城山丘陵周辺にあった別の生産地であったと推測される。前述のように平城山北端に位置する音乗谷古墳を含む奈良盆地の資料では、白色基調の独特の胎土の使用がしばしば確認できるが、南山城や乙訓地域のAc類の胎土は古墳ごとに相違が認められることから、一元的な製品供給ではなく、工人の移動により分布圏が形成されているものと推測される。おそらく各所から製作者が平城山周辺の未知の窯に動員され、埴輪生産に従事することで製作技術を身に付け、その後、帰還して各古墳の埴輪生産に従事したものと考えられる。

こうしたAc類の北方への展開は、盆地南部におけるB類が盆地内へ製品供給を展開させつつ、西方の紀伊にも分布圏を形成していく動きと対比的に捉えることができよう。盆地北部と南山城の親縁性の背景についても、既に鐘方が同地域と和爾氏の勢力基盤が重なる点を指摘している（鐘方2003）。擬制的同族集団としてのワニ氏の勢力圏は、奈良盆地東北部や近江にも広がりをみせるが（加藤謙2013）、Ac類



1　音乗谷古墳　　2・12 冑山１号墳　　3　芝古墳
4・10・11 塚本古墳　　5～7　山津照神社古墳
8・9　西宮山古墳　　13 坊主山１号墳　14 土師片山古墳

Fig. 29　他地域におけるAc類の事例　1：8

が天理市北部において一定のまとまりをみせる点や、近江坂田の塚の越古墳や山津照神社古墳にAc類が伝播している状況はあながち偶然とはいい切れないところがある。さらに高島市鴨稲荷山古墳の埴輪は、全体像は不明ながら、底部調整の板オサエは底面を完全には潰すには至らず、突帯もAc類的な高い突出をもつ。高島から日本海へ抜けるルート上に位置する若狭・下船塚古墳と日笠松塚古墳の埴輪がAc類の特徴を備えることから、鴨稲荷古墳の埴輪もAc類に属す蓋然性が高いだろう。このようにAc類は、南山城や乙訓にとどまらず、近江各所にも分布がおよんでおり、奈良盆地北部から広範囲に連なる擬制的同族関係とそれを介した製作者の動員体制がその背景にあるものと推測される。

このほかにもAc類は、たつの市西宮山古墳、姫路市土師片山古墳、松山市播磨塚天神山古墳、松山市土壇原Ｖ遺跡など、西日本各地へ点的に伝播している。これらは地域内で分布域を形成しないことからも、奈良盆地北部の生産拠点への上番を通じて、それぞれ個別に伝播したものと考えられる。Ac類は、Ｖ群円筒埴輪の諸系統のなかでも特徴の把握が容易で、その分、他の系統よりも伝播の実態を把握しやすいのが実情であり、実際にはそのほかの系統のＶ群埴輪も、Ac類と同様の構造を通じて各地へ伝播しているものと考えられる。それら諸系統の展開を詳細に紐解いていくのが今後の課題といえる。